宮城民医連
東日本大震災

災害復興ニュース

ニュース　=第９９号=
発行日　２０１２年３月１２日
発行　宮城民医連

震災に負けてなるものかという熱い思いで

東日本大震災1年

松島医療生協で犠牲者追悼献花

東日本大震災から１年目を迎える３月 11 日、松島医療生協では、「なるせの郷犠牲者追悼献花」を、なるせの郷跡地で行った。東松島市にあった居宅介護支援ディサービス“なるせの郷”では、地震後の津波で利用者 12 名、職員３名が亡くなられた。

献花台が飾り付けられたテントには午前 11 時から、亡くなられた職員・利用者さんのご家族、市民や遠く県外からもたくさん参列者が訪れ、白いカーネーションや持参したお花を献花、亡くなられた方のご冥福を祈っていました。

95 歳の母がなるせの郷を利用していたという阿部京子さんは、3 月 11 日は母の利用日ではなかったので自宅にいて、地震のあと避難所の野蒜小学校に逃げたが避難所も津波に襲われお母さんを亡くされたとのこと。「なるせの郷では、亡くなられた所長の土井芳子さんはじめスタッフの方々には、本当に良くしてもらって感謝しています。」と話してくれた。

松島海岸診療所の山﨑武彦所長は、震災当時を振り返り「津波で医療機器などを失い、職員も被災していたが、患者さんは次々と診療所に来た。訪問看護ステーションのスタッフは、被災した岩渕純子所長が、避難所から休まずに通っているのに、自分たちも休むことはできないと、団結して大変な状況を乗り越えてきた。震災で松島医療生協が存続できるかどうかもわからない中で、頑張ってこれたのは、全国の仲間の支援とともに、職員ひとり一人に“震災に負けてなるものか”という思いと“松島医療生協を必ず存続させる”という目標があったからだと思う。」と話していた。

いま松島医療生協では、地域で介護サービスを必要としている利用者さんのために、別の場所で居宅介護支援ディサービス事業を立ち上げるべく準備をすすめている。

献花台の前で手をあわせる少女

民医連北海道東北地協医学生合同合宿

震災に遭われたみなさんの事を忘れません

青井専務から被災状況を聞く医学生のみなさん

民医連北海道東北地協医学生合同合宿が、宮城県で開催されている３月 11 日、震災で津波に流された“なるせの郷”を民医連の医学生が弔問に訪れた。参加者全員が献花したあと、青井克夫松島医療生協専務理事が“、なるせの郷”を含む周辺の被災状況、復興計画、今年の秋、診療所の近くにディサービスを作る計画などを紹介。全国の民医連の支援を受けながら出発しようとしていることを話した。

メッセージ入りの折り鶴とタペストリーが青井専務に手渡され、医学生を代表して、川瀬隆一さん（山形大学医学部）が「震災に遭われたみなさんのことを忘れないで、これからの医療に生かしていきたいと」と話した。